

## 『孽海花』における創作態度：その《二十回本》と 《三十回本》の比較

麦生, 登美江  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9826>

---

出版情報：中国文学論集. 2, pp.48-58, 1971-05-01. 九州大学中国文学会  
バージョン：published  
権利関係：



# 『孽海花』における創作態度

—その《二十回本》と《三十回本》の比較—

麦生登美江

清代も終わりに近づいた一九〇〇年代の初頭、いわゆる「譴責」小説が陸続として世に現われた。ここに取り上げようとする「孽海花」はその代表作の一つであつて、発行当時、版を重ねること十五回、実に五万部以上を売りつくすという大流行を招来した作品である。そして賞揚するもの考証するもの、模倣をするもの続編を作るものが後を断たない状態であつた。

周知のように「譴責」小説とは、魯迅が「中国小説史略」において初めて設定した文学ジャンルであつて、政府の失態や腐敗官吏の横暴を糾弾し、併せて自己の理想を訴える、といういわば「匡世」(世なおし)を目的とする一群の露骨尖鋭な小説を指している。そして魯迅は、同書の中で、その代表作として李伯元の「官場現形記」・吳趸人の「二十年目睹之怪現狀」・劉鶚の「老残遊記」・曾樸の「孽海花」をあげている。以来、清末の「譴責」小説といへば、だいたいこの四作が想起されるといふ状況を生み出している。

しかし、魯迅の設定した「譴責」小説という概念に対しては、従来、異論がないわけではない。中野美代子氏は、「譴責」小説と称することに根本的に疑義をさしはさみ、「風俗」小説と規定し、その代表作家として吳趸人を考えておられる。また中国でも、阿英氏は、魯迅が「譴責」小説と称している上述のような小説群を、「全面的反映了晚清的社会」(全面的に晚清の社会を反映した)ものと説いて、必ずしも「譴責」小説とは称してない。<sup>(3)</sup>

たしかに「譴責」小説が、こうした異なった見解を生じさせる要素を有していることは明白である。例えば、吳趸人が「歴史」小説と銘打った「雲南野乘」第一回に、

我想諸志士莫不以割棄土地為恥、自然以開闢土地為榮。我試演一部開闢土地的歷史出來。並且從開闢時代、演至將近割棄時代、好等說這部書的、既知古人開闢的艱難、就不容令人割棄的容易。這等說來、只有雲南歷史、叙起來最有意味。<sup>(4)</sup>

—思うに、諸志士はすべて土地を分割遺棄することを恥

と考え、したがって土地を開拓することを榮と考えるにちがいない。それで私は試みに、土地を開拓する歴史を述べてみよう。なおかつ、開拓時代から、間もなく分割遺棄しようとする時代まで述べて、この書を読む者が十分に古人の開拓の艱難を知って、現代人の分割遺棄の容易さを許さないようになるのをとくと待とう。とすると、ただ雲南の歴史だけが叙述するのに最も意味がある。

と述べているが、この言葉からもわかるように、『歴史』小説といつても、それは明らかに『譴責』精神を盛りこむものであり、したがって『譴責』小説とか、『歴史』小説とかというよきな分類は、それ自体多くの曖昧さを含んでいる。この点に関しては、今後もっと広い視野からの、厳密な検討が是非とも必要とされるであろう。しかし、この論文の目的は、後述のごとく、清末小説のジャンル分けを定義しようとするものではない。そこで、阿英氏がいう「全面的に晩清の社会を反映した」諸小説に、『譴責』性が共通項として含まれていること、および当面の『孽海花』もまた、他の諸要素——ロマンとか清末三十年間の歴史の反映とか——とともに譴責性を色濃く有していること、などを理由として、本論文では一応『譴責』小説という通称に従うことにしたい。

さらに、魯迅の前述の見解に対するもう一つの問題は、『譴責』小説における代表作の選定の仕方である。魯迅が取り上げた四作がはたして妥当性を有するものかどうかについては、すでに阿英氏も

官場現形記雖也反映了這個時代、是不如文明小史写得更廣

範、更清晰。<sup>5)</sup>

——「官場現形記」は、この時代（清末を指す、筆者註）を反映してはいるけれども、『文明小史』の描写がもっとと広範で、もっと明晰なものには及ばない。

と異論を述べている。だとすれば、『譴責』小説の代表作を四作に限定する必要はなくなることになり、むしろ『文明小史』をも含めて代表作とする考え方も成立し得よう。しかし、魯迅の挙げた前述の四作以外の清末諸小説は、現在、単行本として流布している作品が極めて少なく、われわれが清末小説の代表作を選定すること一つにしても、資料の上で非常な困難がある。従つてここでは、清末小説研究には、なお以上のような基本的な課題さえ残されていることを指摘するにとどめて本論へ進みたい。

## 二

『孽海花』の成立過程については、曾樸自身の筆になる「修改後要説の幾句話」が、その間の事情を最も克明に述べている。これによれば、最初、この小説は愛自由者（実は曾樸の友人の金松岑）によつて四・五回の原稿が書き始められたが、それを東亜病夫（すなわち曾樸）が引き取つて修改し、さらに六回以後をこれにつづけて創作し、一九〇五年（光緒三十一年）から六年にかけて、十巻二十回を小説林社から出版した。この「歴史小説・孽海花」と銘打った（二十回本）こそが、前述のごとく、当時としては驚異的な十五版五万部という売れ行きを示したのである。曾樸は最初この小説を六十回まで書き続ける予定で、その回目

の予告まで出したほどであったが、翌一九〇七年（光緒三十三年）、わずかに二回から二五回まで『小説林』に発表しただけで、以後は小説社倒産のため中断のやむなきに至った。ところが、それから二十年を経た一九二八年（民国十七年）、既刊の部分を修改し、とくに最初の六回と第二五回は別物と言つていいほどに大幅な改訂を加えて、改めて『三十回本』として再出版された。

ところで、この『孽海花』二十回本・三十回本に対する批評については、これを大別すると次の二系列がある。

(一) 初版の『二十回本』と修改本の『三十回本』を同列に並べて、一つの作品として批評したものの

(1) 阿英『晚清小説史』

孽海花所以然能得到這樣熱烈歡迎、原因主要在思想性。

此書所表現的思想、其進步是超越了當時一切被目為第一流的作家而上的、即李伯元、吳趸人亦不得不屈居其下。蓋李伯元與吳趸人之思想、雖代表了一種進步的傾向、但始終不能跳出「老新黨」範疇、擁護清庭、反對革命。而孽海花則表示了一種很強的革命傾向。(二二頁)

——『孽海花』がこのように熱烈な歡迎を受けることができた原因は、主として思想性にある。この書が表現した思想は、その進歩性は當時のすべての第一流と目されていた作家を超越したものであつて、たとえ李伯元、吳趸人でも、その下に屈せざるを得ない。けれど李伯元と吳趸人の思想は、一つの進歩的傾向を代表してはいるけれども、しかし

終始「老新黨」の範疇をとび出すことができず、清朝を擁護し、革命に反対した。しかるに『孽海花』は一つの非常に強い革命傾向を表明した。

(2) 陳則光「正確估計『孽海花』在中國近代文學史上的地位」

——揭露胡適誣蔑『孽海花』的反動譯論

但是它有許多優秀的晚清小說中、比較真實全面的反映了中日甲午戰爭前三十年晚清政治社會演變的歷史過程、相當明顯的表現了舊民主主義革命時期反帝反封建的愛國主義思想

和革命思潮。(四一〇頁)

——しかし『孽海花』は多くの優秀な晚清小説の中でも、比較的正しく全面的に中日甲午戰爭の前三十年間の、晚清の政治社會における變遷の歴史過程を反映し、さうとう明確に旧民主主義革命時期の反帝反封建の愛國主義思想と革命思潮を表現した。

(二) 修改本の『三十回本』を初版の『二十回本』より反動化したとする批判

(1) 北京大學中文系文學專門化一九五五級集體編著『中國文學史』四（修訂本）

由於曾樸晚年思想的反動、修改後的『孽海花』在藝術技巧上雖比原本較成熟、但却刪去了最初發表時的一些激烈的詞句。(三七〇頁)

——曾樸の晩年の思想的反動化により、修改後の『孽海花』は芸術的技巧の上では原本に比較してやや熟達しているけれども、最初発表した時の激烈な語句は削除してしまつた。

(2) 复旦大学中文系古典文学組学生集体編著「中国文学史」下冊

尤其應該指出的是由于作者晚年的落后反動、竟將原作中的激烈語句刪削不少、初版中抨擊科舉制度……是歷代專制君王束縛我同胞最毒的手段”、它弄得一般國民、有頭無魂、有血無氣。看着茫茫禹甸、是群主的世產赫赫軒孫、是君主的丑僕”。這樣大胆的反封建的議論、在修改本中不見了。<sup>(10)</sup> (四九九頁)

——とくに指摘しなければならないのは、作者の晩年の落伍反動によつてついに原作中の激しい語句を少なからず削除したことであつて、初版中の科舉制度を攻撃したところ「……歷代專制君主が我が同胞を束縛し來たつた最も惡辣な手段である」とか、「科舉は一般國民を、頭はあつても魂がなく、血はあつても氣力がないようにしてしまつた。ぼうぼうたる中国は、群主の財産であり、かくかくたる子孫は、君主の奴隸であつた」。このように大胆な反封建の議論は、修改本の中には見当らなくなつた。

しかし、私が《二十回本》と《三十回本》とを比較対照したところ、大小六一六か所にわたる相違の存在することが認められた。これらの相違から総合的に考えると、曾樸が晩年には反動化したという新中国における第二系列の批判は、必ずしも當を得ていないように思われる。また相違点をしさいに検討すれば、《三十回本》の方が著しく文体が洗練されており、その点だけからでも、清末と民国になつてからの文体の變化、近代西

洋文学の受容の仕方の問題など、興味ある事實が少なからず見できるはずである。が、それは私の今後の研究課題にすることにして、ここでは一字や二字の小さな異同ではなく、大幅に修正された箇所に着目して、曾樸の思想の變遷を探つてみたい。

### 三

(一) 三十回本で削除された箇所

二十回本にはあつて、三十回本で削除された部分は、次の三か所である。

- (1) 科舉批判 (前出、二十回本第二回)
- (2) 主人公 (金髮青) の不誠実の故に自殺した妓女と、女主人公 (傳彩雲) との因縁話で、多分に迷信的な部分 (二十回本第八回)
- (3) 六十回の回目予告を三十回本として再刊したため削除 (二十回本第二回)

(二) 三十回本に付加された箇所

孫文の革命運動を、二十回本では第四回と第五回に出しているが、三十回本では、それは時期的に早過ぎるので、史実に従つて第二九回に移し、移した後の欠けた部分に次の三点を新しくつけ加えている。

- (1) 一八八四年から八五年にかけて戦われたフランス・ベトナム戦役について、修改本ではより詳しい説明を行なうため次の諸文をそう入。

a 高級官僚の諷刺にとどまらず、政府をも批判の対象にした

文章。

在国家方面想、人才該留心培養、不可任意摧殘、明明白白是箇拾遺補闕的直臣、故意捨其所長、用其所短、弄到兩敗俱傷。(第六回)

——国家の側から考えても、人材は注意して養成すべきであつて、氣まぐれにつぶしてしまつてはならない。明らかに国家の力になる正義の臣であるものを、故意にその長所を捨てて短所を用い、結局虻蜂とらずにしてしまつたのだ。b 買弁外交に終始する李鴻章と、醉生夢死の高官貴人たちの描写。

只可惜威毅伯(李鴻章を指す、筆者註)只知講和、不会利用得勝的機會、把打败仗時候原定喪失權利的和約、馬馬虎虎逼着朝廷簽定、人不知鬼不覺依然把越南暗送。總算沒有另外賠款割地、已經是他折衝樽俎的大功、國人應該紀念不忘的了!如今閒話少說、且說那年法越和約簽定以後、國人中有些明白國勢的、自然要咨嗟太息、憤恨外交的受愚;但一班醉生夢死的達官貴人、却又個個興高采烈、歌舞昇平起來。那時的江西巡撫達興、便是其中的一個。達興本是個綺紈官僚、全靠着祖功宗德、唾手得了這尊榮的地位、除了上詔下驕之外、只曉得提倡声技。他衙門裏只要不是國忌、沒一天不是鑼鼓喧天、笙歌激夜、……(第六回)

——ただ惜しいことに威毅伯は講和だけしか念頭になくて、勝利を得た機會を利用することができず、敗戦の時に取って決めていた利権喪失の講和条約を、うかうかと朝廷に迫つて調印させ、誰も知らないうちにこつそりとベトナムを人

手に渡してしまつた。かくてどうやらその他の賠償や土地の割譲は免れたので、それは彼らの外交折衝の大功であり、國民が記念して忘れてはならないこととされたのであつた。

閑話休題、さてその年のフランス・ベトナム講和条約調印後、國民の中でもいくらかの國勢に明るい者は、もちろん悲痛嘆息し、外交で愚弄されたことを痛憤した。しかし醉生夢死の高官貴人たちは、かえつて大喜びして太平の世を謳歌した。当時の江西巡撫、達興もその一人であつた。達興はもともと貴公子出身の官僚で、まつたく祖先の七光りによつてこの尊貴な地位をやすやすと手に入れたのであつて、上にへつらい下にいばりちらすほかは、ただ歌舞音楽を提唱することしか知らない。彼の役所では、国家の忌日でない限り、一日としてどらや太鼓の音が鳴り響き、笙歌が夜どおし流れないことはなかつた。

C 右のフランス・ベトナム戦役の時に活躍した馮子材の黒旗軍の戦功を、達興の役所で催した曲芸の中の歌に託して紹介しているが、その歌の最後の部分において、李鴻章が外国帝国主義とグルになつてフランスと和議を締結したらしいことを匂わせている。

八日夜追奔二百里、克復了文淵諒山一年来所失的地、乘勝長驅真快意、何難一戰収交趾。(三十八解)

威毅伯得了這消息、不管三七二十一、草草便把和議結。

(三十九解)(第六回)

——八日八晚二百余里を追跡し、文淵・諒山という一年來とられていた地を奪回し、勝ちに乗じて長驅したのはまっ

たく胸のすく思い。もう一戦やらかせば難なく交趾はとれたろう。(三十八節)

——威毅伯はこのニュースをつかむや、一々検討もしないまま、あたふたと講和条約を結んでしまった。(三十九節)

(2)また修改本につけ加えられている点の第二は、曹公坊なる人物(作者曾樸の父、曾之撰だと考証されている)を登場させたことである。その公坊の帰郷について次のごとくいう——

原来公坊那年自以為臭不可当的文章竟被霞郎估着、居然撮了巍科。但屢踏槐黃、時嗟落葉、知道自已不是金馬玉堂中人物、還是跌宕文史、嘯傲烟霞、還我本来面目的好。就浩然有南行之志。這幾天見幾個熟人都外放了、遂決定長行、不再留戀軟紅了。(第五回)

——というのは公坊はあの年自分ではいやらしいことこの上ない文章だと思っていたが、結局霞郎に推察されたように、優秀な成績で科挙に及第した。しかし、しばしば身の落魄を感じるうちに、自分は金殿玉樓中の人物ではない、それよりはやはり詩文をほしきままにし山水を友として、自分の本来の面目にかえった方がよいと覚った。かくて浩然として故郷へ帰ろうという気がおこってきた。そこへこの数日、幾人かの親しい友人が地方へ赴くことになったので、ついに榮耀榮華の甘い夢を断ち切り、帰郷の途につくことに決定したのである。

(3)さらに第三点として、修改本では龔自珍(定庵)が噂話の中に登場する。言うまでもなく龔自珍は、みずから「人は飲みて酔を獲るも我は醒を獲、適然として万載も酩酊し難し」と

詠んだように、一九世紀の前半、まだ人々が「天朝よ」「中華よ」とおごりたかぶってその日暮らしを続けている時、すでに中国の落莫を察知し、この老大国の前途に心を痛めて、魏源(黙深)らと並んで維新変法論の先駆とも言うべき進歩的な思想を形成した人物である。ところで三十回本は、その龔自珍を登場させ、曹公坊に次のごとく語らしめる。

定庵這個人、很有関于本朝學術系統の変遷、我常道本朝の学問、実過超在唐宋元明、只為能把大家的思想、漸漸引到独立的正軌上去。若細講起来、該把這二百年、分做三個時期：……第三時期、才是研究時期、把古人已整理的書籍、進了一層、研求到意義上去、所以出了魏黙深、龔定庵一班人、發生独立的思想、成了這種驚人的議論。(第四回)

——定庵という人は、本朝の學術系統の変遷の上に大きな關係を持っている。私が常に言っていることだが、本朝の学問が、まさに唐・宋・元・明よりすぐれているのは、ただよくみんなの思想を次第に独立した正しい軌道の上に導いていったことにある。もし細かく言うなら、この二百年を三つの時期に分けるべきである。……第三の時期は、やつと研究の時期になって、古人がすでに整理した書籍を、さらに進めて意義の点まで研究し、かくて魏黙深・龔定庵といった人々が出て、独立した思想を生み、この種の驚嘆すべき議論をつくりあげたのだ。

以上を要するに、修改本に付加された第一点は、政府と清末高級官僚への痛烈な批判・諷刺であり、第二点の曹公坊の帰郷の原因もやはり官界批判である。従ってこの二点は、過去の古

いもの、悪いものを打破しようとするいわば後向きの姿勢である。それに対し、第三点の龔自珍を登場させた姿勢は、新しいものを志向する前向きの建設論であつたと見えよう。

(三) 三十回本で書き改められた個所

最後に、二十回本と三十回本で叙述が変化している部分を取り上げてみると次のごとくである。

(1) 在崙樵に関する描写の変化

a (二十回本)

這人筆氣非凡、將來必定發達。<sup>(17)</sup> (第五回)

——この人の筆力は非凡であり、將來必ず大いに出世するだろう。

(三十回本) 削除

b (二十回本)

原來崙樵看法國兵船到了、要想學諸葛武侯空城計嚇退他、那曉得外國人最不會鬧這種小聰明、只架著大炮打來。崙樵左思右想、原要尽忠的、無奈當不起炮火無情、只好頭上頂著箇三寸厚的銅盤、赤著腳鑽在難民淘裏逃回省城來了。<sup>(18)</sup> (第六回)

——もともと崙樵は、フランスの艦船が来たのを見て、諸葛孔明の空城の計に学んでおどかして撃退しようと考えたが、外国人はこうした小俐口さではちっともかき乱すことができず、ただ大砲を据えつけて打ってくるだけであるのを知った。崙樵はあれこれと思めぐらして忠義を尽くそうとしたが、いかんせん砲火の無情さには抗すべくもない、

ただ頭に三寸ほどの厚さの銅板をのせ、はだして難民にまぎれ込んで省城へ逃げ帰った。

(三十回本)

原來崙樵自到福建以後、還是眼睛插在額角上、擡着紅京官大名士の雙料架子、把督撫不放在眼裏。閩督吳景、閩撫張昭同、本是乖巧不過的人、落得把千斤重擔、卸在他身上。船廠大臣又給他面和心不和、將領既不熟悉、兵士又沒感情、他却忘其所以、大權獨攬、只弄些小聰明、鬧些空意氣。那曉得法將孤拔倒老實不客氣的乘他不備、在大風雨裏架着大炮打來。崙樵左思右想、筆管兒雖尖、終抵不過槍桿兒的凶；崇論宏議雖多、總擋不住堅船大炮的猛、只得冒了雨、赤了脚、也顧不得兵船沈了多少艘、兵士死了多少人、暫時退了二十里、在廠後一個禪寺裏躲避一下。等到四五日後調查清楚了、才把实情奏報朝廷。<sup>(19)</sup> (第六回)

——もともと崙樵は福建到着後、ちゃきちやきの京官で大名士でもあるというのを笠に着ていばりかえり、總督や巡撫も眼中になかった。福建省の總督吳景、巡撫の張昭同は本来とても悪賢い人間で、千斤の重荷を崙樵一人の肩に押しつけてしまった。船廠大臣もまた崙樵に対して顔でこそここにこしているが内心好意を抱いておらず、將領でさえよく知らないくらいだから、兵士に人気がある筈もなく、崙樵は身のほど忘れて大權を自分一人で掌握し、ただ小俐口さを發揮して空元氣をつけるだけのことである。ところが誰が知ろう、フランスの將軍クルーペーは遠慮会釈なく彼の不備に乗じて、大風雨の中を大砲で攻撃してきた。崙



樵はあれこれ思いめぐらしたが、筆先いかに鋭くとも結局鉄砲の威力にはかなわず、すぐれた議論いかに多くともどのみち堅船大砲の猛烈さは防ぎきれない。ただ雨をつき、はだしになって、軍艦が何隻沈没しようと兵士が何人死のうと顧みる余裕もなく、しばらく二十里ほど退却して工廠の裏手のある禅寺に避難した。四、五日たつてから調査をすませ、やっと実情を朝廷に報告した。

### (2) 孫文を中心とする革命運動

前述のごとく、二十回本では第四、五回で取り上げた孫文を中心とする革命運動を、修改後の三十回本では史実に従つて第二九回に移しているが、内容にも大幅な改訂を加えており、特に注目されるのは以下に述べる陳千秋の発言がつけ加わっていることである。

#### 《三十回本》

千秋道：「天叢龍伯君我雖没會過、他的令兄宮崎約二郎、是我的好友、他主張亞洲革命、先從中國革起、中國一克復、然後印度可興、暹羅安南可振、菲律賓埃及可救、實是東亞黃種的明燈。可惜死了。天叢龍伯君還是繼續他未竟之志、正是我們最忠懇的同志。」(第二九回)——千秋は言った：「天叢龍伯君には私は会つたことがないが、彼の兄の宮崎約二郎は私の良友です。彼は、アジア革命はまず中国からはじめ、中国を復旧させたらその後インドを興し、シヤム、安南を助け、フィリピン・エジプトを救うことができると主張しておつて、実に(彼は)東亜の黄色人種の希望の光りであつたが、惜しいことに死んで

しまつた。が、天叢龍伯君はやはり宮崎君のまだ遂げていない意志を継いでおり、我々の最も忠実で親密な同志である。」

### (3) 新政への期待

#### 《二十回本》

那一年却是戊子鄉試的年成、江南大主考……(第十一回)——その年はかえつてちようど戊子の郷試の年であり、江南大主考……

#### 《三十回本》

那一年正是光緒十四年、太后下了懿旨、宜布了皇帝大婚後親政的確期、把清漪園改建了頤和園、表示倦勤頤養、不再干政的盛意、四海臣民、同声歡慶、國家政治、既有刷新希望；朝野思想、漸生除旧的動機。恰又遇着戊子鄉試的年成、江南大主考……(第十一回)

——その年はちようど光緒十四年で、西太后は令旨を降して皇帝の成婚後の親政の確かな期日を宣布し、清漪園を改築して頤和園とし、老後の養生に努めて再び政治に干渉する意志のないことを表明された。天下の臣民は声を合せて歡喜し、國家の政治にも刷新の希望が生まれ、朝野の思想にもだんだんと旧を除く氣運が生じて来た。その年はちようどまた戊子の郷試の年にあつていて、江南の大主考……

以上の(1)(2)(3)に挙げたものが、二十回本と三十回本との間で顯著な変化を示している個所である。このうち(1)莊崙樵に関する描写の部分は、二十回本では莊崙樵にいくぶん同情的な筆致

が感じられたのに対し、修改本になると、そのような同情的なニュアンスがまったく消失して、かわりに鋭い諷刺性が表面化していることがわかる。

また(2)孫文を中心とする革命運動の部分では、陳千秋の語り口から、当時の革命家が中国革命をいかに位置づけていたかが察せられる。すなわち、中国革命をヨーロッパ・アメリカ・ロシア・日本などの先進資本主義国に抑圧されているアジアにおける民族解放運動の一環としてとらえ、しかもそのアジアの被圧諸国の中で中国が革命の先頭を切らねばならないとし、その時に中国革命がアジア諸国において引き起こすであろう作用——(帝国主義段階に入った世界資本主義体制と植民地再分割の完了の一角が崩れ落ち、被圧人民に大きな鼓舞激励を与えるであろう)

——までも巨視的な立場から正しくとらえて、当時の革命家たちが中国革命成就のために奮闘していることがわかる。ここには作者のアジア的連帯感が脈打っている。こうしたアジア革命としての的確な把握は旧本の二十回本には見出せなかったものである。

さらに(3)新政への期待の部分は、西太后の執政に対する不満と、光緒帝の親政実施への期待を吐露した部分である。しかし実際には、この時の太后の令旨にもかかわらず、光緒帝の親政は実現されず、依然として西太后の専横が続き、両宮の失和へと事態は進行していった。とはいえ、来たるべき新政に対する作者の大きな期待の気持は、その行間に躍動していることとくに見える。

#### 四

旧本の二十回本と修改した三十回本との間に認められる大きな相違点は上述のごとくであり、こうして『孽海花』の改訂を跡づけてきた今、残る問題は、新中国の学者が曾樸の反動化の唯一の論拠として取り上げている〈科挙批判〉の削除が、一体いかなる意味を持っているか、ということである。この点は以上の論証から考えれば、すでに科挙制度が廃止されて二十数年を経た一九二八年には、科挙に対する痛烈な批判は、時期を失して読者に訴える力が消失したから削除したにすぎず、「曾樸が晩年反動化したから削除した」という批判は一方的でありすぎるし、それはさらに二十回本と三十回本の上述した相違を完全に無視した独断にしかすぎないと思う。要するに、新中国における曾樸批判とはまったく逆転するが、改訂版の三十回本の方が、腐敗官僚に対する覚醒を促して新中国をつくらうとする意欲は、かくだんに強くなっている、と判断するのが妥当だと私は考える。

(一九七〇・一一・三〇)

#### (注)

- (1) 魯迅の『中国小説史略』には、「謹實」小説という独立したジャンルを設定したことに次について言っている。「雖命意在于匡世、似与諷刺小説同倫、而辞气浮露、筆無藏鋒、甚且過甚其辞、以合時人嗜好、則其度量技術之相去亦遠矣、故別謂之謹實小説。」(香港今代圖書公司刊 一九六五年 二三五頁)

- (2) 中野美代子氏の清末小説に關する一連の研究——「清末小説研究——」  
 四（『北大外国語・外国文学研究』第五一八号）に詳しい。
- (3) 阿英『晚清小説史』（香港太平書局刊 一九六六年）八頁。
- (4) 『月月小説』第二一号（京都大学人文科学研究所蔵本による）二頁。  
 注(3)に同じ。八頁
- (5) 曾樸『孽海花』（世界書局刊、楊家駱主編増訂中国學術名著第一輯  
 中国通俗小説名著第一集 第三十五冊、中華民國五一年）一頁。  
 注(3)に同じ。二二頁。
- (6) 人民文学出版社編輯部『明清小説研究論文集』（人民文学出版社刊、  
 一九五九年）四一〇頁。
- (9) 北京大学中文系一九五五級『中国文学史』四（人民文学出版社刊、  
 一九五九年・北京）三七〇頁。
- (10) 复旦大学中文系古典文学組『中国文学史』下冊（中華書局刊、一九  
 五九年）四九九頁。
- (11) 校訂に使用したテキスト  
 〈二十回本〉歴史小説『孽海花』（小説林社刊第一本第一一〇回 一  
 九〇五年、第二本第一一一二〇回 一九一一年 以上を一冊に合訂し  
 たもの）  
 〈三十回本〉 注(6)に同じ。
- (12) 〈三十回本〉 五一頁。
- (13) 同前 五一—一五二頁。
- (14) 同前五九頁。
- (15) 同前四六頁。
- (16) 同前二八頁。
- (17) 〈二十回本〉 七〇頁。

- 18 〈三十回本〉 九一頁。
- 19 同前五〇頁。
- 20 同前三三四頁。
- 21 〈二十回本〉 第二本二頁
- 22 〈三十回本〉 一〇二頁。

## 付 記

次頁に掲げる「曾樸年譜」は、曾樸の長子、曾虚白によって編纂された彼の年譜（摘要）を中心にし、これに中国内外の動きをも併記したものである。だいたい清末の作家には出自・経歴が明白でない者が多い。しかしその中において曾樸は、虚白が編じたこの一万五千字に及ぶ年譜によって、比較的詳細にこれを知ることが出来る清末作家の一人である。

また、この年譜から、私の上述における論旨を裏付ける彼の行動も見出せる。すなわち改訂版『孽海花』は、初版に比べて反動化したとする従来の見解に対して、本論文では、改訂内容の検討を通してその見解が誤謬であることを指摘したわけであるが、そのことは、(1)辛亥革命後、江蘇省議員として政治の舞台に登場した曾樸が、袁世凱の帝制復活の野望に反対し、私財を投げ打ってその野望を阻止しようとしていること、(2)袁世凱逝去後、打ち続く軍閥混戦から江蘇省を守ろうとする行動に出ていること、などによって裏付けられる。

曾 樸 年 譜

世界史

- 1871 ドイツ帝国建設
- 1889 大日本帝国憲法発布  
1891 露仏同盟
- 1895 英露協商
- 1898 米西戦争・ハワイ合併  
1899 [アメリカ] 中国に対する門戸開放宣言  
1902 日英同盟  
シベリア鉄道開通
- 1904~1905 日露戦争  
1905 [ロシア] 血の日曜日  
(第一革命)  
1906 [日本] 南満州鉄道株式会社設立  
1907 三国協商(英仏露)  
1910 幸徳秋水事件  
日韓併合
- 1912 明治天皇崩御
- 1914~1918 第一次世界大戦
- 1917 ロシア十月革命  
1919 ヴェルサイユ条約調印  
1920 国際連盟成立
- 1922 ワシントン軍縮条約  
1923 トルコ共和国成立
- 1928 パリ不戦条約
- 1929~1932 世界的経済大恐慌

中国史

- 1876 芝罘条約(対英)  
1884~85 清仏戦争
- 1892 頤和園完成  
1893 毛沢東誕生  
1894~95 日清戦争
- 1898 戊戌の政変  
1899~1901 義和団事件
- 1903 ロシア、奉天を占領
- 1905 中国同盟会結成  
科挙廃止  
1906 清朝立憲実施を予告  
1907 秋瑾死刑
- 1911 辛亥革命  
1912 中華民国成立
- 1915 日本の二十一か条要求  
文学革命
- 1919 五・四運動  
1920 安徽=直隸軍閥戦争  
1921 中国共産党結成  
魯迅『阿Q正伝』
- 1923 第一次国共合作
- 1925 孫文死す  
1926~1928 国民党の北伐  
1927 国共分離。南京国民政府成立
- 1931 満州事変勃発
- 1934~1936 長征  
1936 西安事件

曾 樸

- 1871 江蘇省常熟県に生まる
- 1889 秀才合格、汪円珊と結婚  
1891 舉人合格、夫人と女兒死  
1891~95 内閣中書として  
北京で奉職  
1894 同文館で仏語学習  
1895 官吏の試験で政局の腐敗を痛感し仕官を断念。  
上海で譚嗣同らと維新を計画  
1897 小学校設立
- 1899~1902 病氣静養
- 1903~1907 小説林社経営  
預備立憲公会に参加  
『孽海花』執筆
- 1907~1911 端方の幕僚
- 1912 江蘇省議員に当選  
1913~1914 国民党員と統一戦線  
1914~1916 軍閥の侵略防禦の為財政管理
- 1916~1917 袁世凱の皇帝即位に反対して私財投入  
1917~1922 官産処長就任  
フランス文学研究
- 1922~1924 禁米処に勤務
- 1924~1926 江蘇財政庁長就任
- 1927 江蘇政務庁長就任
- 1928~1933 文学活動へ復帰。真美善書店創立。  
『孽海花』改訂。
- 1933~1936 帰郷、田園生活。
- 1936 風邪がもとで急死